

二国の学びの中で

知らず知らずのうちに現地校で気が張っていたのだろう。日本人学校に来て僕はなぜだかホッとした。アメリカのグリニッチにある GJS。校門を抜けるとそこは日本のコミュニティが広がっている。耳に入る言語は日本語。懐かしかった。バスを降りて挨拶をすると、気持ちのいい挨拶が返ってくる。僕は約四年間、ニューヨークの現地校に通っていた。四年ぶりの日本の学校。これが新しい第一歩だと思うとワクワクした。

26人のクラスメイト。とにかくここでは一体感を感じる事が多い。全教科を同じ26人と共に受けるので、それぞれの教科における違った面を知ることができると同時に、自分の様々な面も知ってもらえる。そしてお互いをよく知った中で、皆で同じ課題に取り組み協力し合う。それを発表し感想を書くことにより、自分と違った考えに対し深く考察することもできる。この作業が実に楽しい。

一方、現地校では、時間割が各自違い、教科ごとに教室やクラスメイトが違った。自分の意見を発表することが主流で、感想を書くなど人の意見について深く考える機会は少なかった。それはやはり、協調性を重視する日本と、個人個人を尊重するアメリカの違いなのだろうか。

僕は初め、個人主義なアメリカの縛られない感じが心地よいと感じた。そして今となっては臆することなく英語で自己主張もできるようになり、すっかり順応できる気になっていた。しかし、日本人学校の心地よさ、安心感、そしてカリキュラムの楽しさから、やはり僕のベースは日本にあることに気づき、複雑な気持ちになった。現地校でできたアメリカの友達がここに来たらどう感じるのだろうか。違和感を覚えるのだろうか。楽しんでくれるだろうか。

初日に校長先生の話でもあったが、人の意見に耳を傾けながら自分の意見も主張することによって、そこから一つのことを創り出すことの大切さを改めて実感した。これは、協調性を大切にする日本の文化の象徴であり、これからの自分の課題になるだろうと思った。

また、GJSでは目標や将来の夢などを考え、書く機会がある。そこで僕は「元気で前向きで笑顔でいる」という目標をロッカーに貼った。これによって自分を立ち止まって冷静に振り返る時間をもてたと思う。

最後に、これは人数的なこともあるかもしれないが、先生方と生徒の距離が近く、安心感がある。登校時のみならず、下校の際も先生方全員が校門のところで手を振り挨拶をしてくれる。毎日書く日記には、担任の先生が一人一人丁寧にコメントをしてくれる。とにかく見守られているという感じがすごいのだ。

僕は初日の授業で、クラス全体に対する先生の問いに思い切って手を挙げてみた。このような現地校で学んだ意見を主張すること、そしてこれから日本人学校で学ぶ、人の意見に耳を傾けるという協調性を生かして、他人とのかかわりの中で様々なことを見いだしていきたい。